

## 知的障害者のイメージ変容及び実習の充実に影響する要因 ～施設実習を行った学生へのアンケート調査からの考察～

長濱 章雄<sup>1</sup>

Factors affecting trainees' images of mentally-handicapped people and  
satisfaction levels of their training practice

～Analyzing the data from students trained at the facility for people with intellectual disabilities～

Akio NAGAHAMA

### 要 旨

本研究の目的は、知的障害者施設実習で学生が感じる実習の充実に影響する事前要因の分析である。知的障害者施設で実習を行った学生88名のアンケート調査から、実習終了時の充実度が低い学生群では、施設利用者への支援の困難さを強く感じていることが認められた。実習では多くの学生がコミュニケーション手段などを理由に支援の難しさを感じているが、困難を強く感じるほど、実習の充実度を低く評価する学生が多くなっている。支援の困難さへつながる実習前の要因として、交流機会の少なさ、それに伴う知的障害者へのイメージの低さが認められた。また、充実度が低い学生群では、実習後の知的障害者へのイメージ変容が他の学生と比較して低い傾向も確認された。

### Abstract

The purpose of this study is to analyze which factors affect satisfaction levels of students who finished their care training at the facility for people with intellectual disabilities. According to the data from the questionnaire of eighty eight students who had training at the facility (for people with intellectual disabilities). Students who feel less satisfied with care training tend to feel more difficulty to communicate with mentally-handicapped persons using the facility resulting in inability to support them. The reason why many students have negative feelings toward supporting facility users is because they have fewer opportunities to contact them with before their training and accordingly fail to have enough information for creating good (or positive) images toward them. The research data also reveals that students who feel less satisfied with training also tend to feel more difficulty to change their negative image about the facility users.

キーワード：実習生、充実度、事前学習、交流体験、イメージ

key word : trainee, satisfaction levels, previous learning, experiencing exchanges, image

### はじめに

社会福祉施設は適切な事業の実施が義務付けられており、それらの実践は施設の評価として確認することが求められる。事業の一環として、実習生の受入れと適切な指導は施設が担うべき業務であり、全国社会福

祉協議会の第三者評価事業の評価項目に、実習生の受け入れが適切に行われているかの評価項目が記載されている。実習に関する第三者評価は、「II-2-(4)-① 実習生の受け入れに対する基本的な姿勢を明確にして体制を整備している」「II-2-(4)-②

実習生の育成について積極的な取り組みを行っている」の2項目で評価をすることになっている。

社会福祉領域の仕事を目指す学生、もしくは教員免許の取得のための介護体験として、福祉施設で実習を行う学生は多い。その中で、知的障害者の入所施設で実習を行う学生が、どのような事前学習や障害者との交流体験の素地を持ち、知的障害者にどのようなイメージを持ちながら実習に臨み、実習を終えると共にどのようにイメージが変容しつつ、どの程度実習における充実感を得ているかを知ることは、今後の施設実習指導の指針につながるものと思われる。また、実習が充実するかどうかは、目的を明確化した実習のプログラムの作成が必要であるが、事前学習や交流体験の有無、それらに伴う知的障害者への事前イメージも影響するものと思われる。実習後は、多くの学生が実習を充実したものとして捉え、知的障害者へのイメージの向上にもつながっている。しかし、当然のことながらその変化の幅は学生によってばらつきがある。それらの変容に及ぼす影響を明らかにすることは、実習指導において重要な要素となり得る。

実習生の受け入れと適切な指導は事業所の役割だけではなく、実習生の将来へ与える影響も大きい。例えば、名寄市立大学で行われたソーシャルワーク実習後のアンケート調査(2014)における、「実習を終え、自分の福祉を学ぶ姿勢または将来の進路に影響がありましたか」の質問では、「影響を受けた」56.1%、「やや影響を受けた」が31.7%で、多くの学生が実習を通して何らかの影響を受けたと回答しているが、何も変わらないという学生も12.2%いることからそれぞれの学生に合わせた実習指導が求められる。また、影響を受けた学生は必ずしも良い方向を向いているものではなく、実習を通して将来福祉職につくのを止めたという回答もある。このように実習が実習生に与える影響は大きいものであることが示されている。

知的障害者へのイメージ変容では、実習を体験することで、良いイメージへ変容することが、当然に予想される。阿尾・鈴木ら(2000)は、中学生が知的障害児・者と一日のふれあい体験を行うことで、「わずか一日のふれあい体験であっても、障害児・者に対する印象を好意的なものへと変化させる上で効果がある」としている。そのことから、実習を行う学生が事前に交流体験を持つ事で、実習前の知的障害者の理解やイメー

ジを高める効果があるものと思われる。

## I. 研究の概要

### 1. 研究の目的

知的障害者施設で各種資格(保育士、介護福祉士、社会福祉士、社会福祉主事、教員免許)取得に係る目的として実習に取り組む学生を対象とし、実習開始前と終了時にアンケート調査を実施している。実習の充実に影響を及ぼすと思われる事前学習と交流体験、及び、知的障害者へのイメージに関する設問を設定して、実習後のイメージの変容と実習の充実度及び支援の困難性についての関連を検証していく。

### 2. 調査方法

実習生に対して、実習前後にアンケート用紙を配布して個別に回答を求めた。アンケートは実習前後それぞれで3つの設問に対する5段階評価と自由記述の併用である。調査期間は、平成23年度から平成26年度までの4年間の実習期間とし、92名の実習生を対象にアンケートを実施した。そのうち88名(男性33名、女性55名)より有効回答(95.6%)を得ている。有効回答にはそれぞれ全ての設問に自由記述が記載されていた。実習生の目的とする資格は、保育士42名47.7%(男9名 女33名)、教員免許25名28.4%(男13名 女12名)、介護福祉士2名2.3%(男2名)、社会福祉士17名19.3%(男9名 女8名)、社会福祉主事2名2.3%(女2名)となっている。

### 3. アンケート項目

実習前3項目

設問1 学校の講義(事前学習)の中で「知的障害」について、どの程度学びましたか(十分と感じていますか)。

回答 不十分 1 2 3 4 5 十分

設問2 実習以前に知的障害者との交流体験(ボランティアや日常交流等)はありますか。

回答 少ない 1 2 3 4 5 多い

設問3 実習前に「知的障害者」にどのようなイメージを持っていますか。

回答 悪い 1 2 3 4 5 良い

実習後3項目

設問4 実習後は「知的障害者」にどのようなイメージを持っていますか。

回答 悪い 1 2 3 4 5 良い

設問5 知的障害者の支援にあたり、困難を感じましたか。

回答 感じない 1 2 3 4 5 感じた

設問6 今回の実習を有意義と感ずることができましたか。

回答 感じない 1 2 3 4 5 感じた

#### 4. 倫理的配慮

倫理的配慮として、各実習生へのアンケート調査時に、研究の目的、方法、意義、匿名性の保持、また調査結果は研究目的以外には使用しないことについて口頭で説明し、アンケートの回収をもって了承を得た。

## II. 調査結果

### 1. 実習前のアンケート結果

(1) 事前学習における「知的障害」の学び

男性は、2の評価が15名(45.4%)と一番多く、女性は3の評価が24名(43.6%)と最も多い。5の評価は男女共に少なく、3と4を合わせた評価では、男性17名(48.5%)、女性34名(61.8%)となっており、事前学習では、女性のほうが十分と感じている割合が高い(表1)。女性のほうが事前学習や講義での学びの質を高く評価する傾向がみられた。

表1 実習前の学習の充実度 人数(%)

性別		不十分 1	2	3	4	5 充分	計
	男	2(6.1)	15(45.4)	13(39.4)	3(9.1)	0	33
	女	1(1.8)	20(36.4)	24(43.6)	10(18.2)	0	55
	計	3(3.4)	35(39.8)	37(42.0)	13(14.8)	0	88

自由記述例(記述数88)

- ・実際に知的障害児者とふれあう機会が無いため、十分に学んだとは言い切れない。
- ・90分間の講義があり、自らも本を読んだり先生に話をきいたりしましたが、実際に実習をさせていただく立場として足りているのか不安はあります。
- ・知識は与えられたが定着はしなかった。実感を伴った理解ではなくうわべだけの学びだった。
- ・講義として学んでいるが、画像や映像が少なく施設がどのようなかが分かりにくいと思います。
- ・あまり専門的に学んだ記憶がなく、学びが不十分です。
- ・知的障害についての定義や手帳について学びましたが、あまり具体的には学べていません。
- ・学校の講義の中で学んだことはあくまでも表面的な話であり、知的障害のことにに関しては知らないことが多い。
- ・障害についてはテキストを通して特に深く学んだつもりではいるが、十分とは感じていない。

### (2) 知的障害者との交流体験

この設問は、実習前にどの程度知的障害児者と交流経験があるかを問うたものであり、評価1が0回、2が1～3回、3が4～6回、4が7～9回、5が10回以上となっている。

評価2の1～3回が最も多く、交流内容は福祉の養成校入学後における単発的なボランティア体験が多い。3や4と評価した学生ではボランティア等による交流が定期的に行われるなどの現状が自由記述から読みとれたが、そのような機会を持つ学生は少なく、評価3と4の合計は男女合わせて12名となっている。評価5の交流が10回以上の学生では、単発的なボランティア交流よりも、「友だちや親せきに知的障害を持つ人

がいた」などの日常的な交流が行われているケースが多くなっている。この場合では、交流や関わりが特定の人に限られているケースが多い。また、実習を開始するまで全く交流体験がない学生も16名いた。

表2 実習前の知的障害者との交流体験 人数(%)

性別		少ない 1	2	3	4	5 多い	計
	男	8(24.2)	9(27.3)	5(15.2)	0	11(33.3)	33
	女	8(14.5)	31(56.4)	5(9.1)	2(3.6)	9(16.4)	55
	計	16(18.2)	40(45.4)	10(11.4)	2(2.3)	20(22.7)	88

自由記述例(記述数88)

- ・サークル活動で知的障害者施設でのお祭りの手伝いをしました。
- ・同級生との関わりやサークルでの関わりを通して交流は多かった。
- ・子供の頃同級生がいたので関わりは多かった。
- ・イベント類に参加して触れ合いは多い。
- ・軽度の知的障害、自閉症を持った小学から青年の方との月1回程度のボランティア活動に参加している。
- ・近くに施設があり日常的に挨拶などがある
- ・各種事業を通して深く交流をしてきた。
- ・小・中学校で特別支援学級があり、関わる機会は多くありました。

## (3) 実習前の知的障害者へのイメージ

知的障害者へのイメージ評価では、中間である3の評価が最も多く、男女合わせて51名(58.0%)と半数を超えている。マイナスイメージを持っている学生は少なく、評価1は0名、評価2で3名となっている。評価4と5のプラスのイメージが高い学生は、男女合わせて34名(38.6%)となっている。実習前の知的障害者へのイメージを男女別に分けてみると、4と5の評価合計では、男性11名(33.3%)より、女性が23名(41.9%)と、女性の方が良いイメージを持っている。評価3以上で見ると性差は特になく、マイナスイメージの評価2の男

女の割合は同等である。生川・那須(2002)によると、社会福祉を専攻する男女学生の知的障害者への実践的好意に対する差はないとされているが、事前イメージにおいても同様の結果と言える。また、教員を目指す学生や保育士、社会福祉士などの取得資格による差も特には見られない。

自由記述によるマイナスイメージを表している意見として、「何をしでかすか分からない、そんな人ばかりという先入観や偏見がある」、「話がかみ合わない恐ろしいイメージがある」、「とても親切で人なつこいイメージと暴れたりすると怖いイメージ」などがあった。

表3 知的障害者への実習前イメージ 人数(%)

性別		悪い 1	2	3	4	5 良い	計
	男	0	1(3.0)	21(63.7)	8(24.2)	3(9.1)	33
	女	0	2(3.6)	30(54.5)	20(36.4)	3(5.5)	55
	計	0	3(3.4)	51(58.0)	28(31.8)	6(6.8)	88

自由記述例(記述数88)

- ・子供の頃クラスの知的障害児と遊んでいたのも特に悪い印象は持っていない。何かする時に他より行動が遅いというイメージでした。
- ・コミュニケーション能力が低く、意思疎通を図るのが困難というイメージがある。
- ・会話が成立する人とならない人があるので、会話の成立しない人との接し方に不安があります。
- ・生活などのできることが出来ない人たちなので大変そうだと思う。
- ・感情のコントロールができずに騒ぐこともあるが、私たちと変わることはないと思います。
- ・障害も個性という考え方に立って接していくことが当たり前という感覚にある。
- ・我慢することが苦手で自分のやりたいことしたいことで常に動いてるイメージ
- ・正直良いイメージは持ってないが、普通の人と同じように接すれば何も気にすることは無い気がする。

## 2. 実習後のアンケート結果

### (1) 実習後の知的障害者へのイメージ

実習後の知的障害者へのイメージは、概ね向上しており、事前イメージでは評価2が3名いたが、実習後では0名となっている。評価3が7名(8.0%)で、4と5を合わせたプラスのイメージは、81名(92.0%)となっている。実習後に評価が下がった実習生が1名おり、

5から4になっている。

また、評価を3とした実習生の自由記述を見てみると、「様々な人がある。明るくて元気な方が多い。」「あくまでも私たちと一緒にというイメージを持ちました。」「素直で喜びや悲しみを素直に表現することができ、繊細な分だけ人にやさしくできるイメージ。」など、評価が3であって良いイメージとしての意見が見られている。

表4 知的障害者への実習後イメージ 人数(%)

性別		悪い 1	2	3	4	5 良い	計
	男	0	0	1(3.0)	15(45.5)	17(51.5)	33
	女	0	0	6(10.9)	20(36.4)	30(52.7)	55
	計	0	0	7(8.0)	35(39.8)	46(52.3)	88

自由記述例(記述数88)

- ・関わりの中で喜びや楽しさを感じた。私の手を引いてくれたことで元気づけられたこともあった。
- ・障害があるとか関係なく、日々の生活を充実して過ごそうとしていると思う。
- ・一人ひとり個性があって障害がない人と変わりがいないところも沢山あると思った。
- ・出来ない事、理解できないことも多いですが、理解できることの可能性の大きさを知りました。
- ・コミュニケーションの難しさは感じたが、表現豊かでコミュニケーションが楽しくなった。
- ・初めは緊張もあり、少し怖いと思いましたが、一人ひとりの個性を知ること、温かいイメージを持ちました。
- ・一人ひとり個性がはっきりしてて、自分の思いをしっかりと持っていて基本的に優しい。
- ・重度・最重度でも「こんなことまで出来るのか」と思うことを多々見ることができました。

### (2) 知的障害者への支援の困難性

知的障害者への支援において困難を感じたという学生は、評価4と5を合わせると67名(76.1%)と、多くの学生は実習を通して知的障害者への支援の難しさを感じている。自由記述を見るとコミュニケーションの難し

さ、利用者のニーズを理解することの難しさを多くの学生が感じていることが分かった。特に男女比では、評価4と5を合わせた割合が、男性は66.7%、女性が81.8%と、男性に比べると女性の方が困難性を感じる傾向が確認された。

表5 支援の困難性 人数(%)

性別		感じない 1	2	3	4	5 感じた	計
	男	0	3(9.1)	8(24.2)	9(27.3)	13(39.4)	33
	女	0	3(5.5)	7(12.7)	22(40.0)	23(41.8)	55
	計	0	6(6.8)	15(17.0)	31(35.2)	36(40.9)	88

自由記述例(記述数88)

- ・会話ができない方も多いため、私たちに何を求めているのか等、ニーズを見つけ出す部分は難しいと感じた。
- ・特性を知らないと支援できないことを感じた。能力や身体状況など配慮すべきポイントを把握する必要性を感じた。
- ・一人ひとりの実態や性格などを把握することができず、一人ひとりにあったペースや内容の支援ができませんでした。
- ・特に言葉でのコミュニケーションが取れない利用者の方の支援がとても難しいと感じました。
- ・コミュニケーションの取り方に大いに戸惑った。知る努力によって改善されることを学んだ。
- ・自分の価値観の偏りや視野の狭さから困難とを感じるが多かった。
- ・個々の特性を見極めてコミュニケーションを図るのは非常に難しいと感じた。
- ・自分の未熟さ是否めないが、個々の非言語コミュニケーションの内容が理解できず会話が困難であった。

## (3) 実習に関する充実度

3と評価した学生が1名いるが、他の87名は、評価を4か5としており、殆どの学生が実習体験(プログラム)を有意義と感じ、そこから充実感を得ていることが

分かる。特に評価5で強く充実感を感じた学生は、75名(85.2%)で、実習体験による学びが大きいことが確認できた。男女による4と5の評価の割合を見てもそれほど大きな差異はない。

表6 実習の充実度 人数(%)

性別		感じない 1	2	3	4	5 感じた	計
	男	0	0	0	5(15.2)	28(84.8)	33
	女	0	0	1(1.8)	7(12.7)	47(85.5)	55
	計	0	0	1(1.1)	12(13.7)	75(85.2)	88

## 自由記述例(記述数88)

- ・失敗しても迷惑をかけてもそのたびに指導してもらえありがたさを感じた。利用者さんとの関わりは大変なことや落ち込むこともあったが、それがなければ実習の意味がなかったと思える。
- ・実習を通して感動したり傷ついたり、反省したりする場面があったからこそ、有意義な実習でもあった。
- ・最初に持っていたネガティブなイメージを壊してくれた。
- ・もっと積極的に動けばもっといろいろなことを経験できたと思います。
- ・学校だけでは学ぶことが出来ない実践での関わりや直接支援での言葉掛けの工夫を知ることができた。
- ・実習期間があっという間と感じるくらい充実した勉強になった実習でした。座学より何倍も濃い内容を利用者さんとの関わりから学びました。
- ・今まで見たこともない、感じたこともない施設職員、利用者さんの中で実習が出来たことが勉強になりました。
- ・自分自身とても成長ができた。毎日が勉強で有意義な実習ができた。

## 3. 事前学習と各設問との関連性

## (1) 事前学習と知的障害者への事前イメージ

事前学習における自己評価と、実習前の知的障害者へのイメージの関係性では、事前学習の充実度を1とした学生3名は、知的障害者への事前イメージがいずれも評価3となっている。事前学習の充実度を2及び3と評価した学生は、事前イメージの評価では3が一番多く、20名(57.15%)、24名(64.9%)である。評価が4と5のプラスのイメージを持つ学生も、それぞれ合わせて15名(42.85%)、10名(27%)となっており、

事前学習の充実度評価が一段上がることで知的障害者へのイメージが高くなる傾向が見られる。学習の充実度の評価を4とした学生は、3のイメージが4名(30.8%)で、9名(69.2%)の学生は事前イメージの評価が4となっており、プラスのイメージを持つ学生の方が多くなっている。調査対象者が少ないことで精度への課題はあるが、事前学習に対する充実度を高く感じている学生ほど、事前に持つ知的障害者へのイメージは高くなる傾向が確認された。

表7 事前学習と知的障害者への事前イメージ 人数(%)

	設問③評価1	設問③評価2	設問③評価3	設問③評価4	設問③評価5	計
設問①評価1(3名)	0	0	3(100)	0	0	3
設問①評価2(35名)	0	0	20(57.15)	13(37.15)	2(5.7)	35
設問①評価3(37名)	0	3(8.1)	24(64.9)	6(16.2)	4(10.8)	37
設問①評価4(13名)	0	0	4(30.8)	9(69.2)	0	13
設問①評価5(0名)	0	0	0	0	0	0
計	0	3(3.4)	51(58)	28(31.8)	6(6.8)	88

## （２）事前学習と支援の困難性

本研究における実習先での実習体験は、殆ど最重度者との関わりとなるため、多くの学生はコミュニケーションやニーズ把握への難しさを感じており、その結果、支援における困難性を高く評価する学生は多い。事前学習を４と評価した学生では、評価が２、３の学生に比べると困難性を評価５として強く感じた割合が若干低くなっているものの、事前学習評価との特別な関連は見

られない。コミュニケーションを難しく感じることで支援の困難性を感じるかどうかでは、学生それぞれの捉え方として、目標の設定値のレベル差や困難と感ずるよりも、利用者支援などの目標達成に向けたモチベーションとしているなどの違いがスーパービジョンでの振り返りにおいて感じられた。なお、スーパービジョンは各日毎に１時間設定している。

表８ 事前学習と支援の困難性 人数(%)

	設問⑦評価1	設問⑦評価2	設問⑦評価3	設問⑦評価4	設問⑦評価5	計
設問①評価1(3名)	0	0	1(33.3)	2(66.7)	0	3
設問①評価2(35名)	0	2(5.7)	8(22.9)	10(28.6)	15(42.8)	35
設問①評価3(37名)	0	3(8.1)	4(10.8)	12(32.4)	18(48.7)	37
設問①評価4(13名)	0	1(7.7)	2(15.4)	7(53.8)	3(23.0)	13
設問①評価5(0名)	0	0	0	0	0	0
計	0	6(6.8)	15(17.0)	31(35.2)	36(40.9)	88

## （３）事前学習と実習の充実度

事前学習と実習の充実度の関連では一定した傾向は見られず、充実度を評価５とした学生を見ても、事前学習の充実評価にはバラつきがある。事前学習を評

価１と２とした学生も実習の充実度は高く評価する傾向があり、実習での取り組みと事前学習の充実が一致するとは言えない。事前学習と実習の充実に関する内容を細分化した上での再調査の必要性が感じられた。

表９ 事前学習と実習の充実度 人数(%)

	設問⑧評価1	設問⑧評価2	設問⑧評価3	設問⑧評価4	設問⑧評価5	計
設問①評価1(3名)	0	0	0	0	3(100)	3
設問①評価2(35名)	0	0	0	3(8.6)	32(91.4)	35
設問①評価3(37名)	0	0	1(2.7)	7(18.9)	29(78.4)	37
設問①評価4(13名)	0	0	0	2(15.4)	11(84.6)	13
設問①評価5(0名)	0	0	0	0	0	0
計	0	0	1(1.1)	12(13.7)	75(85.2)	88

## 4. 交流体験と各項目との関連性

### （１）交流体験と知的障害者への事前イメージ

実習以前に知的障害者との交流体験を持つことが、知的障害者のイメージを向上させていることが確認された。実習以前に交流体験が全くない評価１の学生は、地知的障害者へのイメージが、２と３の評価を合わせると、14名(93.3%)となっている。交流体験評価が３以上の学生は、事前のイメージに、１と２の評価は無く、全て３以上となっている。交流体験が３の学生は、事前イメージが３と４に集中しており、交流体験が４の学生は事前イメージが３名とも４となっている。交流体験が５の学生は、イメージ評価も３以上で、５の評価をした学生が４名と、全般的に高い評価につながっている。李・中村(2011)らの調査によると、障害者に対す

る意識の変化をボランティア参加前後で比較した場合、「近寄りたいと思う」については、「そう思わない」が３倍以上に増加との結果をだしており、交流体験がイメージを高めると言える。

表10 交流体験と知的障害者への事前イメージ 人数(%)

	設問③評価1	設問③評価2	設問③評価3	設問③評価4	設問③評価5	計
設問②評価1(16名)	0	2(12.5)	13(81.25)	1(6.25)	0	16
設問②評価2(40名)	0	1(2.5)	25(62.5)	12(30.0)	2(5.0)	40
設問②評価3(10名)	0	0	4(40.0)	6(60.0)	0	10
設問②評価4(2名)	0	0	0	2(100)	0	2
設問②評価5(20名)	0	0	9(45.0)	7(35.0)	4(20.0)	20
計	0	3(3.4)	51(58.0)	28(31.8)	6(6.8)	88

## (2) 交流体験と支援の困難性

交流体験で評価を5とした学生は多くの場合、日常的な交流体験を持つ者が多い。支援の困難性は知的障害者へのコミュニケーション手段やニーズ把握に特に困難を感じる傾向があるため、日常的に交流が行わ

れた評価5の学生は、支援における困難を感じる割合が、他の学生より若干低くなっており、困難性の評価4と5の学生は、65%となっている。交流体験が1から4までの評価の学生における支援の困難性は、評価4と5を合わせた割合がいずれも70%以上となっている。

表11 交流体験と実習での困難性 人数(%)

	設問⑦評価1	設問⑦評価2	設問⑦評価3	設問⑦評価4	設問⑦評価5	計
設問②評価1(16名)	0	1(6.25)	3(18.75)	6(37.5)	6(37.5)	16
設問②評価2(40名)	0	2(5.0)	5(12.5)	14(35.0)	19(47.5)	40
設問②評価3(10名)	0	1(10.0)	2(20.0)	3(30.0)	4(40.0)	10
設問②評価4(2名)	0	0	0	2(100)	0	2
設問②評価5(20名)	0	2(10.0)	5(25.0)	6(30.0)	7(35.0)	20
計	0	6(6.8)	15(17.0)	31(35.2)	36(40.9)	88

## (3) 交流体験と実習の充実

実習終了後に感じた実習の充実度では、殆どの学生が一定以上の充実を感じているが、交流体験の多

い学生はより高く充実感を得ていることが確認された。特に実習前に交流体験が無い学生は、実習の充実感が他の学生より低く表れている。

表12 交流体験と実習の充実度 人数(%)

	設問⑧評価1	設問⑧評価2	設問⑧評価3	設問⑧評価4	設問⑧評価5	計
設問②評価1(16名)	0	0	1(6.25)	4(25.0)	11(68.75)	16
設問②評価2(40名)	0	0	0	6(15.0)	34(85.0)	40
設問②評価3(10名)	0	0	0	1(10.0)	10(90.0)	10
設問②評価4(2名)	0	0	0	0	2(100)	2
設問②評価5(20名)	0	0	0	1(5.0)	19(95.0)	20
計	0	0	1(1.1)	12(13.7)	75(85.2)	88

## 5. 知的障害者への事前イメージと各項目の関連性

## (1) 事前イメージと支援の困難性

事前イメージを1と評価した学生はいないが、2と評価した学生3名は支援の困難性を4が1名、5が

2名と高く評価されている。事前イメージで3以上の評価をした学生では、困難性を2及び3と評価した学生もそれぞれに見られている。

表13 知的障害者への事前イメージと支援の困難性 人数(%)

	設問⑦評価1	設問⑦評価2	設問⑦評価3	設問⑦評価4	設問⑦評価5	計
設問③評価1(0名)	0	0	0	0	0	0
設問③評価2(3名)	0	0	0	1(33.3)	2(66.7)	3
設問③評価3(51名)	0	4(7.9)	8(15.7)	17(33.3)	22(43.1)	51
設問③評価4(28名)	0	2(7.15)	6(21.4)	11(39.3)	9(32.15)	28
設問③評価5(6名)	0	0	1(1.7)	2(33.3)	3(50.0)	6
計	0	6(6.8)	15(17.0)	31(35.2)	36(41.0)	88



## (2) 事前イメージと実習の充実度

事前のイメージが高い学生は、実習の充実度を高く感じる傾向がある。知的障害者への事前イメージが高

いということは、不要な偏見を持たずに実習に入ることにつながっているため、実習スタート時点でスムーズな取り組みが行われているものと思われる。

表14 知的障害者への事前イメージと実習の充実 人数(%)

	設問⑧評価1	設問⑧評価2	設問⑧評価3	設問⑧評価4	設問⑧評価5	計
設問③評価1(0名)	0	0	0	0	0	0
設問③評価2(3名)	0	0	0	1(33.3)	2(66.7)	3
設問③評価3(51名)	0	0	1(2.0)	10(19.6)	40(78.4)	51
設問③評価4(28名)	0	0	0	1(3.6)	27(96.4)	28
設問③評価5(6名)	0	0	0	0	6(100)	6
計	0	0	1(1.1)	12(13.6)	75(85.3)	88

## III. 考察

## (1) 事前学習の効果

実習が座学で得た知識を活かしながら体験する貴重な福祉現場体験であることから、実習を行った多くの学生は実習を通して自己変容につなげることが出来ている。しかし、実習終了時に学生が等しく同じようなレベルで充実を感じている訳ではない。中にはこの仕事の難しさを過度に感じることで、実習の充実感よりも出来なかったという気持ちの方が強くなる学生もいる。充実感を得るためには実習中及び前後における様々な要因が考えられるが、一つには実習前の学習や交流体験などの実習前環境における多くの個人差が実習の充実に影響を及ぼすものと思われる。

調査前には、事前学習と交流体験の評価が高い学生は、いずれも知的障害者へのイメージと実習の充実は高くなるものと予測された。しかし、実習の充実を5と評価した学生75名と、3及び4と評価した学生13名の、事前学習の評価の平均値では、充実が5の学生は2.6、3及び4の学生は2.9と、実習の充実を低く評価した学生群の方が事前学習の評価が若干高くなっており、事前学習の学びを高く評価した学生が、実習での充実が高いという結果には繋がっていない。

アンケートの自由記述を見ても学習の不足を感じている意見が多く、この設問では評価を5とした学生はいない。このことから、事前学習が基本的なものであり、実習に活かされる座学として学生が受けとめていないという見方もできる。自分が学んできたものが実践に活かせる知識であることを知るためにも、知識と連動させる実習展開が求められる。

## (2) 交流体験の効果

実習前に知的障害児者との交流体験を持つ学生は、交流の機会が多いと実習の充実度が高くなる傾向が見られており、交流体験による知的障害者の理解は実習の取り組みに効果的であることが確認できた。交流体験がもたらす効果として、実習前に持つ知的障害者へのイメージが高まることが挙げられる。渡辺・植中(2003)は、小学生が障害児者と交流した際の態度の研究として、障害児(者)との交流経験は、障害児(者)への受容的態度に肯定的な影響を与え、交流経験のなかで、参加した児童が「楽しさ」を体験し、「学び」を強く意識した時に、その効果が大きくなったとしている。しかし、単純に受容態度が促進されないとも述べており、障害の程度や人としての特徴が多様であり、相互交流の内容もさまざまであることをあげている。

今回の交流体験については、回数を主に確認しており、交流の内容に焦点を当ててはいないが、知的障害者への実習前イメージとして5の評価を出した6名の学生は、実習以前の知的障害者との交流経験を見ると、6名中4名は評価が5となっており10回以上という交流体験は知的障害者のイメージ向上につながっている。

また、実習以前に交流体験は多いが、実習の充実度で4と評価した学生からは、交流は親戚との関わりであって知的障害者を広くイメージできていなかった。また、障害の重い方との交流がなかったため、実習を開始すると戸惑いは大きかったと述べている。そのことから多様な交流体験を行うことが、より実習に向けて効果的であると言える。

知的障害児者との交流が全く無いという学生も16名(18.2%)おり、日常的な接点がないという点では、日本における障害者と分ける教育体制、施設化対策の

弊害も一つにあると思われる。

### (3) 知的障害者の事前イメージと事前学習及び交流体験との関連

事前交流体験の有無が実習の充実度を高める要因となっていることが確認できたが、それは事前学習においても同様で、学習の充実度から実習前に知的障害者のイメージを高める方向へ作用していることが確認できる。

したがって事前学習と交流体験の質をどのように高めるかで、知的障害者のイメージをプラスの方向に高めスムーズに実習の展開が図れるものと思われる。本研究における事前交流は学生の主体性によるものが殆どであり、交流の質を高めるためにはプログラム化された実習と関連する交流が必要と思われる。また、実習体験はさらに知的障害者のイメージを高めることになり、アンケート回答をしてくれた学生88名の多くが、実習後には実習前に持っていた知的障害者へのイメージを向上させている。知的障害者へのイメージでは、1名が実習前評価5から実習後には4へと下がっている。実習前に評価が高い学生は、実習後も評価が変わらない割合が高いが、2及び3と評価した学生では、2の評価の学生は3名全員が評価を高くしており、3と評価した学生も51名中45名の評価が上がっている。田中・須河内(2004)は、施設実習における知的障害へ

の接触体験は彼らに対する偏見解消に効果的であると述べているが、事前のイメージが低い学生は何らかの偏見があり、それが実習体験を通して大きく改善されたと言える。事前の豊かな交流を多くすることで偏見を取り除くことが実習を充実させるための有効な手段と言えよう。

### (4) 支援の困難性と実習の充実度

利用者とのコミュニケーションの難しさなどを理由に、支援に困難性を感じる学生は多いが、評価では一人の学生を除き、87名が評価を4ないしは5としており、困難を感じながらも多くの学生は実習での充実度を高めている。しかし、困難性の評価を5とした学生では、実習の充実度も低くなる傾向があり、4と評価した学生の割合は10名(27.8%)と高くなっている(表14)。困難性はある程度難しい課題に向かうという意味で、達成における実習の充実につながる一要素としての意味合いはあるが、困難性が高すぎると、達成度よりも出来ないという気持ちが強くなり、充実度が十分に感じられないと言える。本郷・松岡(2007)は、実習前後において利用者とのコミュニケーションにおいて特に不安感の軽減が大きいと指摘をしている。したがって事前学習と交流体験によるイメージの向上は、知的障害者に対する偏見を減らし、実習時の支援の困難性を和らげる効果があり、実習の充実度の向上につながる要因と言える。

表15 実習の困難性と充実度 人数(%)

	設問⑧評価1	設問⑧評価2	設問⑧評価3	設問⑧評価4	設問⑧評価5	計
設問⑦評価1(0名)	0	0	0	0	0	0
設問⑦評価2(6名)	0	0	0	0	6(100)	6
設問⑦評価3(15名)	0	0	0	2(13.3)	13(86.7)	15
設問⑦評価4(31名)	0	0	0	0	31(100)	31
設問⑦評価5(36名)	0	0	1(2.8)	10(27.8)	25(69.4)	36
計	0	0	1(1.1)	12(13.7)	75(85.2)	88

## IV. まとめ

実習中に感じる困難として、実習の期間だけでは十分なコミュニケーションやニーズの把握など、支援の基本を高めることが難しいことが示されている。しかし、困難を感じながらも実習から得るものが多いことが、殆どの学生が充実した実習を行っているという回答していることから判断できる。これは、総体的に福祉分野における対人支援の難しさと魅力の双方が評価として表れているものと受け止められる。また、充実したと感じる学生が

多いことは、次代につながる学生に対する実習の重要性を示しているものであり、今後における実習指導の重要性を改めて示唆していると感じた。そのため、実習の充実を高めていくためには、実習に向けた事前学習、交流体験等の関わりによるイメージの向上が重要とされる。ただし、松村・横川(2002)は、知的障害者に対する態度を好意的なものにするためには、情報(知識)に関しても接触に関しても、知的障害者に対する一人ひとりの自発性や積極性を養っていくことが肝要と述べているように、形だけの事前学習や交流体験にならぬ

ように、学生自身が目的を持って主体的に学ぶ姿勢が求められる。そのためには、先にも述べたように、事前交流のプログラム化を行うことで、実習の充実に対する影響が高まると思われる。社会福祉士資格取得のための相談援助実習では、事前に入門実習として5日間ほどの実習体験を行う養成校も多くなっているが、他資格の取得における実習に関しても各養成校における交流体験の取り入れも一つの方策として考えられる。

実習の充実は事後学習にも影響するものであり、充実の中で得た数々の課題も事後学習が可能である。学生、養成校、実習現場の指導者の協働によって、実習開始前から事後の学びまでの一連の流れにおける実習教育体制が求められる。

今回の研究において交流体験が実習に及ぼす影響を明らかにした。また、事前学習が知的障害者へのイメージ向上に少なからず影響を与えていることも合わせて確認できたが、どのような交流がより実習に向けて効果的であるかは検討していない。実習に向けた目的を持った交流体験と事前学習体制を図ることと、学生の学びの意識とを関連させることで実習に向けた事前の取り組みの効果は高まると考えられるため、今後具体的な研究課題としていきたい。

## 文 献

- 阿尾有朋・鈴木恵太・吉武清實・上埜高志(2000)『一日ふれあい体験が中学生の障害児・者に対する態度に及ぼす影響』東北大学教育学部研究年報 第48集 P215
- 生川善雄・那須理絵(2002)『知的障害者に対する大学生の態度構造－専攻、性と関連づけての検討－』東海大学健康科学部紀要第7号 2001
- 田中淳子・須河内貢(2004)『知的障害者に対する援助経験による態度変容に関する基礎的研究』岡山学院大学・岡山短期大学紀要27号 P59-67
- 名寄市立大学アンケート(2015)『実習評価前システム等についての学生アンケート結果の概要(抜粋)』2014年度実習報告会・懇話会資料 2015. 1. 25
- 本郷秀和・松岡左智(2007)『社会福祉援助技術現場実習の実習効果意識に関する一考察－福岡県立大学社会福祉学科学生の現場実習に関する意識調査より－』福岡県立大学人間社会学部紀要Vol.15 No. 2 P13-26